

### 2014.3.2 「主の道をゆく」 マルコによる福音書6:14～29

この物語は、ユダヤ歴史家ヨセフスによると、史実としてはもう少し深い内容になっている。ヨハネが何故、殺されなければならなかったのか…。ヨハネはヘロデとヘロディアの不法な結婚を批判していたわけだが。しかし当時の王侯貴族の間では、こういった不法な結婚はよくあることで、不法性はなくとも殆どが打算的な政略結婚ばかりだったという。隣国との和睦のために嫁をもらうということ。日本の戦国時代の武将を見るとよくそういう政略結婚があった。ヘロデの元の結婚は、そういう政略結婚だったようである。それは、隣国アラビアの王の娘との政略結婚をしていた。ところがヘロディアとの不倫と結婚によって、アラビアとの関係に亀裂が走り、アラビアとの武力衝突が始まった。結果は、ヘロデの軍事的敗北で、一部の領土をアラビアに奪われてしまう。ただ、徹底的な侵略に至る前にローマ軍の仲裁的な介入でヘロデ自身の首は事なきを得た。しかしこの戦争によって、ガリラヤ地域の民衆の間には多大な犠牲が強いられ、多くの民衆の血が流されたという。

ヨハネがヘロデの結婚について批判しなければならなかったのは、こういう事情があったためだと言われている。そしてこの批判と抗議こそが、ヨハネに死をもたらすきっかけになった。支配者の傲慢と横暴によって民衆に犠牲と苦難が強えられることへの抗議と批判の結果として、ヨハネの死はもたらされたのだということを感じたい。

よく教会は、政治的なことに余りかかわらない方がいいという牧師やクリスチャンの人たちがいる。基地問題とか社会問題にかかわる教会は、成長しないという人たちがいる。もし、そういう人たちの考えで行くと、ヨハネはこんな無惨な死を遂げずにすんだかもしれない。ただし、そうなるとヨハネはヨハネでなくなるのである。

ヨハネは「主の道を整え、その道筋をまっすぐに」(マルコ 1:3)する者として紹介されている。まさに「主の道をゆく」者としての歩みをされたということ。今や誰もが認める日本の超右傾化の中で、教会が教会としてあるべき姿が問われている。「主の道をゆく」教会とは何か。(神谷)